

シニア専修コース けやき便り

第13号

編集発行

園田学園女子大学

シニア専修コース

「けやき便り」編集クラブ



生涯学習のリテラシー

本学名誉教授 河合 利光

今年の6月、文部科学省から国立大学について、文科系学部・大学院組織を要請の高い分野へ転換・統廃合するよう通知が出されました。賛否両論がありました。これは間接的に、本学の生涯学習に関わる問いかけともいえます。特に生涯学習では教養が重要なので、現代の情勢の変化の中で自身の学びを捉えておく必要があるからです。

古典的には人文学の主な学習法は講義か読書でしたが、グローバル化と情報化の進行は、私たちの暮らしだけでなく研究方法や学び方さえすっかり変えてしまいました。情報機器やメディアから膨大なデータが得られる現代では、他者から知識を教えてもらうだけでなく、そのデータから必要な情報を収集・選択し、学問分野や国の別を超えてグローバルに自ら考える学びが重要になります。事実、そのようなデータリテラシーの促進とか文理融合型の研究や組織編成の試みが、近年、全国的に拡がりつつあります。

要するに、リテラシーからみれば人文学の重要性はむしろ大きくなっているけれども、時代に合わせた学び方が必要という見方もできます。とりわけ私が平成17年の創設時から関わってきたシニア国際文化学科は、地球規模の人間文化を対象とします。このような新分野では、講義を聞いて楽しむことも大切ですが、現地の膨大なデータから総合的に学ぶ経験がないと、概して、学びの楽しさも意義も受講者には十分に実感できません。

それで5年ほど前から、当時の総合生涯学習センターのスタッフの事情（第11号の松成元所長参照）もあり、専攻学科のデータリテラシーの向上、観光や現地体験、有志による雑誌の編集、グループ学習などをカリキュラム化してきました。実際、相当に困難を伴う作業でしたが、本年度で何とか全体像が見えてきました。さすがに本専攻コースで学ぶ受講生です。各自の人生経験や知的関心を活かして熱心に取り組んでおられ、今後の成果が楽しみです。当専修コースが、より豊かな生涯学習の場になるよう期待しております。

目 次

表紙 生涯学習のリテラシー	本学名誉教授 河合 利光	P1
第52回けやき祭	けやき便り編集クラブ	P3
熱烈歓迎 台湾留学生との交流会開催	研究生 阪田 正樹	P4
平成27年度 国際文化学科1年生歓迎会	国際3年 樽井 敏彦	P7
「山口先生を囲む茶話会」を実施	国際1年 櫻井 秀也	P8
平成27年度文学歴史学科3年生の懇親会	文歴3年 青木 利明	P9
「国際文化学科1年生前期打上げ懇親会」を実施	国際1年 櫻井 秀也	P10
平成27年度「文学歴史学科1年 懇親会報告」	文歴1年 柳川 寛雄	P11
「国際文化学科 3年だより」から	国際3年 馬場 正子	P12
新たな発見を求めて 自転車一人旅	研究生 高木 貞夫	P14
学ぶことの楽しさ	研究生 小西 温代	P15
神戸と姫路のベトナム寺院を訪問する	国際3年 樽井 敏彦	P16
市バスの中で	国際3年 楊 錦華	P18
文字文化の斷層を越えて—舊漢字を覚える—	文歴3年 相田 晴夫	P19
琵琶湖車窓の旅	研究生 西島登志子	P20
Not my business	情報3年 徳田 將之	P21
文学歴史学科9期生 同期会	研究生 木下 俊造	P22
歴史の道・木の芽峠と夜叉が池へ	研究生 橋本 秀明	P23
台湾のお嬢さんをお預かりして	情報3年 峠田 桂子	P24
梅田食べある記	文歴3年 青木 利明	P26
マッターホルンへの挑戦	研究生 橋田 利生	P27
二時間あまりの八十八ヶ所めぐり	情報1年 藤原多計治	P28
晶子と武郎有情	研究生 村松 広子	P29
総合生涯学習センターからのお知らせ	総合生涯学習センター	P30
編集後記	けやき便り編集クラブ	P31



第52回けやき祭 2015年10月17日（土）～18日（日）

暑かった夏を無事に越え、秋の深まりを感じる好季節にけやき祭開催の声を聞く。今年はシニア専修コースからコーラス部だけが参加となり少々寂しい気がしたが、2日間天候に恵まれた活気ある大学祭だった。野外には40店舗もの屋台が並び、学生や子供連れのお客様で例年通り賑わっていた。



今年のテーマは「JOY!!」＝喜びの意味。我々シニアにとっては日々が平穏であることが何よりの喜びである。けやきなどの木々が色づき始め、心も浮き立つ。



（今年のスタッフTシャツ）

「写真を撮って～！」と声を掛けられたのは年1回けやき祭でだけ会う剣道部の学生。なかなかシニアと現役学生が交流ない中、唯一の顔馴染み。思わずハイタッチする。聞くともう4年生だそうで時の経つ早さに驚く。掲載許可をもらったので記念にパチリ！



2日目の18日（日）12時より開花亭にて我らがシニアのコーラス部が日頃の練習の成果をお披露目。駆け付けたシニアの仲間たちが応援する中、指揮の田井靖侃先生、ピアノ伴奏の山岸陽子先生の下で次の6曲が耳に心地良く歌われていく。

1. まっかな秋
2. 故郷の人々
3. 故郷を離るる歌
4. 大好きな日曜日
5. 幸せ運べるように
6. 群青（東北大震災での福島県中学校制作）

それぞれの人生を素敵に過ごしてこられて、ご縁あって巡り会われた方々の絶妙なハーモニー♪ 最後は全員で「里の秋」を合唱した。

帰り道、私は思わず＜まっかな秋＞をハミングしていた。



（文と写真：「けやき便り」編集クラブ 井上）

熱烈歓迎 台湾留学生との交流会開催

研究生 阪田 正樹

台湾の開南大学から2週間の短期留学生11人とシニア専修コースの学生12人による交流会が7月15日に開催されました。

今回が初めての企画であり、また気温も35℃と暑い中、交流会でのみなさんの会話があまり弾まず、気まずくなるかと不安でした。しかしそんな不安は徒労に終わりました。

最初から友好的な雰囲気国際交流センターの村端所長の短い挨拶と開南大学から引率された北島先生の挨拶（短くしてとこちらがお願いしたのですが）から始まりました。

時間に限りがある中、留学生の1分間スピーチが始まり、自己紹介、日本でやりたいこと、見たいこと、食べたい日本料理などさまざまな日本での抱負の紹介がありました。

次はシニア学生側の1分間スピーチで、酒井さん、樽井さん、十河さん、西田さん、三島さん、落田さん、小林さん、松隈さん、井上さん、新川さん、中村さんたちがいろいろな話をされました。

西田さん、井上さんが北京語で話をされたときは、留学生から感嘆の声があがりました。次に日台友好手品ということで、落田さんの3つのお題で手品が始まりました。



ここでも留学生から感嘆や驚きの声があがりました。留学生から後で手品の種明かしの図面をお願いされるほど盛り上がりしました。

若い学生の笑いや驚きは、私たちシニアが失いがちな素直な感情表現を、少しでも取り戻すいいキッカケになったかなと考えています。

次に場所を移動し、留学生2～3人とシニア2～3人単位による茶話会の開催です。

最初、留学生は緊張していましたが、駄菓子（ブラックサンダーなど）を食べながら緊張も解けていき、各テーブルではいろんな話が出ていました。話し声、笑い声が聞こえています。留学生のみなさんは一様に日本語が上手で、スムーズに進みました。





留学生が昼からの予定があるというので、盛り上がっていた歓談を中止し、各テーブルで話題になった内容を一言話していただきました。

各テーブルでは、いろんな話題が出て茶話会にふさわしい雰囲気でした。

また、井上さんから留学生に日本の扇子のプレゼントもあり、留学生全員が感謝感激していました。

同時に留学生にアンケートをしました。結果の一部は次頁に報告するとして、“けやき便り”の読者に問題です。

【1930年代の台湾で有名な日本人、“八田與一”を知っていますか？】ほとんどの留学生は知っており、尊敬しています。

小学生の社会科の授業で習うそうです。

八田與一は日本から派遣された水利技師であり、烏山頭ダムと1万6,000キロに及ぶ灌漑用水路を造り、台湾中南部の嘉南平原を肥沃な大地にし、穀倉地帯にしました。また、水力発電で作られた電気を供給しました。

また、3年輪作制を考案し、水を有効活用したことも知られています。

最後に玄関にて記念写真。



私たちシニアの学生は、園田学園女子大学に数年通っているにもかかわらず、学生同士のこういう交流も少ない中、貴重な体験ができ、また、楽しむことができました。こういう機会を作っていただいた国際交流センターや開南大学のみなさんに感謝します。

シニア専修コースで聴講のみであったことから、積極的に受講生が話をするこのような取り組みを、もっともっと広めていけたらと考えています。

国際交流センター村端所長、北島先生とも来年も開催希望ということでした。

また、国際交流センターでは、来年はもっと時間を多くするとか充実した内容を考えているとのことです。

今回参加できなかったシニアのみなさんから第2回、第3回と続けていく上で、企画、改善点等、ご意見を拝借できたらありがたいです。



開南大学短期留学生へのアンケート結果

留学生 11 人全員にアンケート回答をいただきました。(2015.7.15)

- 1 **なぜ日本語を学びたいですか (為何想學習日語)**
インターネットで日本を調べて、日本が大好きです
と日本にいたい、日本の文化が好き、日本語が好
きだから、日本の文化をもっと知りたい、日本語の
発音が美しいから、日本のアイドルが好きだから (2
人)、字幕がなくてもアニメやドラマの内容を知りたい
から、ジャニーズが大好きだから
- 2 **日本に来て驚いたことは (来到日本感到吃惊的
是)**
カラスが多い、道がとてもきれい、電車の乗り方、
街がとてもきれい (2人)、日本人は歩くのが速い、
タクシーの色が沢山ある、朝ごはんを家で食べるこ
と、自転車が多い (2人)
- 3 **日本に来て失敗や恥ずかしいことは何ですか (來
日本失敗和害羞的事是什麼)**
パスポートを落とした、内向的であり日本語が話
せない、電車で間違えた、電車の乗り方、迷子になっ
た (2人)、日本語をよく間違える (前はいつも勉強だ
けなので 2人)
- 4 **今回、大阪で何をしたいですか (此次, 想在大阪
做什麼)**
服を買いたい、大阪城や姫路城へ行きたい (2人)、
タコ焼き食べたい、関西弁を勉強したい、日本語で
会話をしたい、一輪車を勉強したい、観光 (2人)、
たくさん食べ物を食べたい
- 5 **日本語は難しいですか (日語難嗎)**
英語より簡単 (漢字があるから)、ちょっと難しいけ
ど大丈夫、難しい (5人)、文法とか単語が難しい、
漢字の読み方がわからない、日本の文化が難しい
- 6 **日本で日本料理は食べましたか (在日本吃了日本
菜嗎)**
コンビニのそば (とても美味しい)、ヒジキ、ラーメン、
お好み焼き (美味しい)
- 7 **日本料理を台湾で食べたことがありますか? (在
台灣吃過日本菜嗎)**
全員 11 人ある
- 8 **7の回答者に 何を食べましたか? (吃了什麼?)**

寿司、ラーメン、そば、タコ焼き、卵焼き、お好み焼
き、すき焼き、カツ丼、刺身、ラーメン

- 9 **台湾料理で一番好きなのは? (台灣料理中最喜歡
的是)**

豚血糕、牛肉麵、小籠包、ルーローファン、お母さんが
作る料理、水餃子、苺菓かき氷、牛肉そば、チャーハン

- 10 **士林夜市など夜市はよく行きますか (很常去士林夜
市之類的夜市嗎)、**

月1回1人、年1回2人、行かない3人、よく行く4人

- 11 **朝食は何を食べますか? (早飯吃什麼)**

コンビニ、朝食店、豆乳4人、パン7人、サンドイッチ
6人、粥1人

- 12 **台北、台中などで美味しいと思う料理、お店を教え
てください (請告訴想在台北好吃的飯菜, 店)**

蒸肉圓 (新北市)、桃園の千楓 (鉄板焼き)、鼎泰豊 3
人、台北の“東區”、東区粉圓、臭豆腐、牛肉そば (建
宏)、台北の西門町にいっぱいある

- 13 **日本のドラマ、アニメは見ますか? なにを? (看
日本的電視劇, 動畫片嗎)**

妖怪ウォッチ、ラブライブ、大好きです、ワンピース、
PSYCHO-PASS、しゃこキャラ、君に届け、アンパン
マン

- 14 **日本で知っている有名人は? (例: きゃりーぱみゅ
ぱみゅ) (在日本知道的名人呢?)**

近藤麻理恵、神田さやか、福山雅治、木村拓哉、ジャニ
ーズ、EXILE、三代目 JSB、高橋みなみ、浜崎あゆみ
AAA、嵐、北川景子

- 15 **昔の台湾での日本人 “八田與一” を知っています
か? (知道在從前的台灣的日本人 “八田與一” 嗎?)**

① 知っている 9人 ② 知らない 2人

- 16 **過去に日本に来たことがありますか? (之前有去過日
本嗎?)**

① ある 6人 ② ない 5人

- 17 **日本に親戚等知り合いはいますか? (有親戚或認識
的人在日本嗎?)**

① います 4人 ② いない 7人

(注: 誌面の関係で一部の質問は割愛しています)

平成27年度 国際文化学科1年生歓迎会

国際文化学科3年 樽井 敏彦

5月29日（金）の午後3時から、国際文化学科の1年生の方を迎えての歓迎会がチャティで開催されました。今年の歓迎会は国際文化学科の1年生16名、2年生2名、3年生14名、研究生5名が参加し、来賓として河合先生と松山先生にご出席いただきました。



最初に河合先生と松山先生からの歓迎の挨拶の後、参加者全員による記念撮影が行われました。次に、研究生の山田さんの音頭による乾杯の後、テーブルに並べられたご馳走を食べながらの歓談が始まりました。今回は立食形式の宴会ということもあり、各テーブル毎に楽しく賑やかに会話が弾んだようです。



その後、司会者による今年の各学年のクラス委員の紹介があり、1年生の自己紹介に移りました。自己紹介では、9名が全員参加したという女性達のチームワークの良さが素晴らしく、

入学して2ヶ月も経過していないのに、皆さんが和気あいあいと学園生活をととても楽しく満喫されている様子うかがえました。おそらく男性陣も元気な女性陣に引っ張られて、勉学は勿論のこと、旅行やクラブ活動にも積極的に取り組まれることだろうと思います。



続いて、先輩たちからの挨拶と今までのシニア生としての経験に基づいた貴重なアドバイス、助言がありました。



最後に国際学科恒例の3年生の落田さんによる3種類のマジックが披露され、皆さんの拍手喝采を受けました。演技後にデザートケーキとコーヒーをいただき、本日の歓迎会はお開きになりました。

これを契機に同じ国際学科で学ぶ仲間として親交を深めて仲良く、楽しくやっていければとの思いを強くした次第です。

「山口先生を囲む茶話会」を実施

国際文化学科1年 櫻井 秀也

6月19日（金）午後の講義を終えたあと、午後3時より、「チャティ」で、研究生の山田さんの呼びかけにより、山口悟先生を囲んでの「茶話会」を実施しました。山口先生は、西洋史がご専門で、金曜日の午前に「ヨーロッパの社会と文化（前期）」、後期は「アメリカの社会と文化」、午後に「西洋文化特論」を担当されています。今回は両コースの生徒22名が参加しました。クッキー、プリンなどたくさんのお菓子にコーヒー、お茶、ノンアルコールビールなど、準備万端。



研究生の河合さんの司会進行で、まずは山口先生のご挨拶。乾杯に続いて、参加者の皆さんの講座への思い入れなどユーモアを交えて自己紹介。落田さんはその場で特技のマジックをご披露（喝采）。そのあとは、先生へのプライベートにまで突っ込んだ質問攻め。

Q: 本当の専門・専攻は？ A: イギリス史が専門です。ロシア（ソビエト）史も好きです。夢がありますね。

Q: ご家族は？ A: 妻と四歳になる双子の男の子がいます。実は私自身も女の子との双子の一人なんです（一同びっくり）。

Q: 趣味、生きがいは？ A: いろいろな方から趣味は、と聞かれて困るのですが、とりあえず読書と答えています。生きがい、といわれて

も・・・毎日充実、楽しく生きています。



最後に先生から「みなさん、普通の話を読まれるかと思っていましたが、難しい質問が多くてびっくりしました」とのお言葉。たしかに、「来年の講義のテーマをぜひ中東にしてください」と迫ったり、「クリミアはどうなるのでしょうか」などといった最近の世界情勢についての見解をお聞きする場面もありました（先生は軽妙にご回答）。



今回のような、講師の先生を囲んでの「茶話会」は、シニア専修コースでは初めてとのことでしたが、みなさんすっかり盛り上がり、先生とも大いにお近づきになれた気がします。

次回は年度末にもう一度！を約束して午後4時15分に閉会しました。

平成27年度文学歴史学科3年生の懇親会

文学歴史学科3年 青木 利明

7月8日に「平成27年度文学歴史学科3年生」の懇親会を開催しました。開催場所はいつもの「かごの屋」さん。入学時25名だった人員も3名が退校し、現在の人員は22名。

今回はその22名が全員出席という高出席率でした。このクラスの結束力の強さを感じます。



今年度はカリキュラムの関係で、お互いに授業で全く顔を合わせる事のない人も何名かおり、久しぶりの再会に近況報告から始まり、お互いの受講科目の内容や講師の評判など、色々な話題で話が盛り上がりました。

予定の2時間30分が、あっという間に過ぎてしまいました。最後に集合写真を撮り、全員揃っての卒業を約しての解散となりました。



「国際文化学科1年生前期打上げ懇親会」を実施

国際文化学科1年 櫻井 秀也

7月13日（月）前期授業の最終日、午後の講義を終えたあと、午後3時半より、「チャティ」で懇親会を実施しました。国際文化1年の我がクラスの23名が参加（2名欠席）、必修科目の講師である松山利夫先生（多文化共生論）と窪田暁先生（文化人類学入門）にも出席いただくことができ、また総合生涯学習センターから榊井課長も駆けつけてくださいました。

まずは全員そろって記念撮影。そして真鍋クラス委員の挨拶、お二人の先生からそれぞれお言葉をいただいたあとに、岡田クラス委員の乾杯でスタート。この日は用意されたバイキング

スタイルの料理、ビール、焼酎、ソフトドリンク、さらにクラスの2名の方から「竹鶴」（偶然同じ銘柄のボトル）の差し入れもあつて話もはずみます。

しばらく歓談後、全員順番に1分を目途で挨拶。メートルがすでに上がりつつあるシニアには1分ルールは忘れられがちで、つい話が長くなる人も。真鍋クラス委員からユーモアを交えた「注意勧告」が発せられるも、さほど効果な

し？

ともあれ、松山先生と窪田先生のすばらしい授業への絶賛と感謝の声が数多く聞かれました。全員の挨拶が終わると席を好きなところに移し、わいわいがやがやも増幅。女性陣はいつの間にか窪田先生を囲んで「3年生を終えたら、卒業旅行に窪田先生の案内でドミニカへ旅行しましょう！」などと話がまとまりつつあるようでビックリ（ドミニカは窪田先生のご専門でフィールドワーク先）。



あつというまの楽しい懇親会でしたが、先生に年末の忘年会にも来ていただくことをお願いし、午後5時過ぎにお開きとなりました。

このあと、火のついたシニアの勢い止まらず、有志が、お二人の先生を無理やり？誘って12名ほどで2次会へ。先生、しつこい酔っ払いシニアに最後までご丁寧にお付き合いいただき、ありがとうございました！



平成27年度「文学歴史学科1年 懇親会報告」

文学歴史学科1年 柳川 寛雄

今日は本当に暑い。その言葉しか出てきません。でもシニアの文歴1年のメンバーは、暑さを乗り越えて燃えています。懇親会も熱気ムンムンでした。

必須授業前期最後の7月13日、文歴1年が初めての昼食懇親会を持ちました。午後の授業を受講しておられる方や予定のある方の5名を除いた16名の参加がありました（全員21名）。



クラス委員の秋山さんの挨拶でスタート。そこで先日開催の合同クラス委員会の報告もありました。

その後、食事をしながら参加された方々から順に恒例の自己紹介をしていただきました。



クラスには地元（尼崎）の人が意外に少なく、遠くは往復3時間、交通費数千円かけて登校されている方。退職前の仕事が同業種だということを初めて知った方。他のシニアカレッジに参加したことがあり顔なじみの方がいる方。シニア専修コースの評判を聞き入学された方など。

また多くの方が園田に来てよかったと感想を述べられており、改めて参加者全員が実感した次第です。



文歴1年生の当面の目標は、休まず通学する（授業を受ける）。これがシニア学習の一番重要な（大切な）ことだと思います。そして「アクティブシニア」として行動が続けていけるよう努力をすることです。

昼食懇親会は12時45分に始まったのですが、小生、都合で14時過ぎに店を出ました。その後も懇親が続き、アルコールメンバー7名も時間通りに終わったようです。

後期も皆で頑張っていく決意（大げさですが）として、集合写真を記念に撮りました。

「国際文化学科 3年だより」から

国際文化学科3年 馬場 正子

1. 「縁」について

今回は「縁」についてのおはなしです。最近あまり話題になりにくいようですが、それはそれで無縁全盛ということでしょうか？ 縁には、血縁、地縁、社縁といろいろあります。これを外国と比較、時間的経過でみるとおもしろいことがわかってきます。日本は意外なことに地縁が強い社会のようです(もちろん個人差はありますが・・・)。

これはアジアではめずらしく、北アジア、南アジア、東アジア、西アジアと比べても非常に違いがはっきりしているようです。よく日本はお年寄り、祖父母を大事にしないと言われるのはこの血縁軽視にあるのでしょうか。しかし、これは見方を変えると他人、周りの人にやさしいとも言えます。日本人は周りの目を意識して、行動し、公衆道徳をよく守る人が多いといわれます。一族のために尽くし、めんどろを見なければならぬという血縁社会とは一線を画しています。アジアでは親族の頼みは断りがたいのか、親族優遇の汚職のはなしはよく聞くことです。一族の繁栄だけを望むせいか、封建社会を脱しきれず、国の発展が思うように進まないということもあるようです。

日本のアニメや漫画は広くアジアに受け入れられていますが、日常的なドラマはそれほどもなく、韓国ドラマにはかなわないようです。これは血縁関係が色濃くにじむ韓国ドラマにたいして日本のドラマは薄味ということだと思います。おしんは例外で、この血縁関係が色濃くえがかれ、イランやサウジアラビアなど西アジアを巻き込んで大人気だったようです。

地縁社会は親族の助けを期待できず、地域に甘えることもできないので、しつかり働く必要があつたのです。地域に対して責任を負い頑張る必要がありました。そのため地域を無視し、

無責任な態度をとり、迷惑をかけると村八分という制裁がありました。

このような地縁社会はいつごろからあらわれたのでしょうか。江戸時代が浮かんできそうですが、もっと昔、律令制のころといわれています。公地公民や班田収受はすぐには定着しませんが、以来千年以上経つうちに少しずつ定着していったのでしょう。そのため、江戸時代、少し余裕のでてきた村人が村を出て旅すると、途方もない解放感があって、好き放題の無責任な態度になったといえます。「旅の恥はかき捨て」です。

近代になると、次男三男を中心に村を出て地縁のない町にでることが多くなりました。地縁から自由になりましたが、代わりに会社をひとつの社会とみなして、社縁社会ともいうべきものがあらわれました。

現代はこの社縁からもはずれる人々があらわれました。社会的に孤独で無縁の人も増えましたが、自分の趣味や考え方の合う人同士でゆるく付き合う人々も現れてきました。ネット社会というのも現れてきました。弱い結びつきですが自分たちで選び取った縁ともいえます。

今アフリカの本をよんでいます。近現代史なのですが、キリスト教を自国文化に取り入れる中で、聖家族という考え方がでてきたということが書かれていました。いろいろな縁があるものです。

色々な国や社会を研究されると思いますが、この「縁」という見方でものをみていくのもおもしろいと思いませんか？



伊丹の行基像 仏縁？

2. 異人と異界

異人といえば「赤い靴」のうたを思い浮かべる人も多いのではないのでしょうか？

この場合の異人さんは欧米人なのでしょうが？ しかし赤坂憲雄『異人論序説』によると、欧米人など知らない古代人にも異人さんは存在していました。異人さんのいる「異界」については世界中で考えられていたようです。

古代王権成立前後から、共同体こそが自分たちの住むべき場所であり、周縁部はもう異界であると考え、そこで生活する人は「異人」と考えていました。

共同体内部は血縁者、主従を結んだ者、貸借関係のある者でした。逆に考えると、血縁の無い者、主人をもたない者、「無主・無縁の民」は異人でした。場所を考えると、山、峠、海の向こうは異界であり、そこにすむ人は異人でした。

そして、共同体内部にも異人を持つようになりました。障害をもつ者、病人（らい病など）、共同体追放者などです。追放者は乞食となつてさすらい人となりました。らい患者も旅に出され、裏山の道をたどりながら聖地を巡ったようで、かつたい道とよばれていました。

また、一時的、通過儀礼の者も異人として扱われました。妊婦、新生児、後の元服以前の者などです。妊婦は産屋をつくり、そこで出産ということもあったようです。



しかし、これらの人々と共同体内部の人が出会うところ、市では、卑なるものが聖なる者になる逆転現象が起きました。乞食が寿詞を述べたり、さすらい人が奉納の舞を舞ったり、遊行僧が説教をしたりしていました。市では壺、布、米、履物、海産物などを売っていました。

年1回から月1回～月3回と増えていきました。

また、市以外の場所にも特異な場所がありました。寺社、橋、大通り、山林などです。これらの中で避難所と認められるところがありました。そこは他の場所とは異なるところ、異界と認められました。逃げ込むと、それまでの縁が切れます。逃げ込むと、離婚できる縁切り寺もその一つです。

村を抜け出し、追っ手に負われていても、この山に逃げ込むと、主人をもたない無宿者になれる山などです。また、橋の下などは芸能を展開する聖なる場所にもなりました。

古代・中世は厳しく差別しつつ、時に立場を変える社会だったようです。

これは王の存在に関係するようです。山口昌男によると、王とは共同体にふりかかる災厄や穢れを一身に引き受け浄化する存在だったようです。そのため災厄が起こるたびに、初期王権内部では王殺しや王子追放が頻繁にありました。これを避けるため、偽王なるスケープゴートが王権内部に必要でした。

司祭者に大きな権限をもたせたこともありました。司祭者は日知り＝聖となりました。大きな航海にはこのような人を乗せ、うまくいかないと死罪となったこともあったようです。

藤原氏も、もともとは「みこともち＝神言の伝達者」と称していました。そして王に替って、実権を握っていきました。もちろん、しっかりスケープゴートをおきました。卑なるものを聖なる者にうまく変身させながら・・・。

こんなことを考えながら縁切り寺＝異界の地の映画「駆け込み女と駆出し男」をみると面白かったです。

当記事の一部に差別用語や表現が使われている箇所がありますが、『異人論序論』などからの引用であり、歴史的な文脈での使用であると判断し、そのまま掲載いたします。

「けやき便り」編集クラブ

新たな発見を求めて 自転車一人旅

今回は、多彩な趣味をお持ちでシニア生活を謳歌されている研究生 高木貞夫さんをご紹介します。

園田シニアの人間探究4

◇ただ今我が道を邁進中

小学生から続けておられる書道は、雅号『城山』日本書芸院無鑑査員の資格を持つプロ並みの実力。10年前、音楽一家の中でお父さんもせめて楽譜位は読めるようにと始めたドラムに今はどっぷりと浸かり、また健康のためにと始めた自転車乗りは新たな発見を求めて遠く一人旅へとエスカレート。

◇還暦を迎えての挑戦

還暦を迎えたのを機会に始めた自転車は、最初は家の周りから次第に距離を伸ばし、今は自宅から淀川沿いに約2時間かけて20キロメートル程走るのが日課。

行動範囲も自宅を起点に神戸、南港、京都へと広がり、遂には琵琶湖一周、淡路島、小豆島、種子島、周防大島などの島々を踏破するまでにしました。

そして北海道の大地を走破への挑戦とつながっていきました。北海道一周の旅へとかき立てた原動力は、新たな発見を求め、別の世界を見てみたいとの探究心と自然に親しむ気持ちでした。

◇自転車を友に 北海道一周一人旅

前半1回目は平成23年7月に小樽～稚内、後半2回目は平成24年7月に稚内～網走～根室～釧路を各々1週間で踏破する旅でした。

1週間の旅は、あっと云う間に終わってしまいますが、計画は2ヶ月ほど前からで、あれやこれや想像しながら地図や時刻表等を片手に綿密な計画を練っていくのが、本当に楽しいのだそうです。見せていただいた地図には、細かい数字がびっしり。

前半の旅では、小樽から石狩川を渡り北上すると長いトンネルに入りましたが、真っ暗な中、

行き交う車の轟音の中を狭い路肩を一人自転車を手押しして進むのは地獄のよう。トンネルを出て明るい空を見たときの安堵感は、今も鮮明に覚えています。更に日本海を左手にオロロンラインを北上し、浜益、増毛の町を通過して稚内へ向かう道中、クマ出没注意の表示を見て緊張し、鹿、キツネなどの出迎えを受けながら、自然豊かな地を快走、雄大な自然を満喫しました。朝早く出発し、60キロメートル程走破する無理のない行程を組み、民宿の温泉で疲れを癒す時が最高でした。

後半の稚内～釧路では、宗谷を朝4時過ぎに出発し、1日の走りでは最長の100キロメートルをオホ



ーツクラインにそって雄武へ。途中、時々出会うツーリングの人とエールの交換をしながら英気を養い、また大自然の美しさを満喫し疲れも吹っ飛びました。未知の地で色々な体験が出来るのが旅の醍醐味です。

◇次の目標に向けて エンジョイシニア！

平成25年、トカラ列島にあるスティーヴンソン著の海洋冒険小説『宝島』のモデルとなった宝島へ行き、財宝を隠したと言われる洞窟で宝探しなどして少年時代にタイムスリップ。

次の旅は更に南下し、沖縄一周の旅を計画中です。まだまだ若い人には負けないという気力、体力には脱帽です。現在、古事記等の歴史書を読破されていますが、これら地域の歴史を通して旅先の地の理解を深めていきたいとのことでした。

さて大阪市内を走り廻るうちに、自転車の上だからこそ見えてくる町の姿を、数多く発見したそうです。その貴重な財産を是非とも本などに纏められ、我々にも公開して頂くようお願いして、インタビューを終わりました。

(インタビュー「けやき便り」編集クラブ 伊藤、石田)

学ぶことの楽しさ

今回は、70歳にして一念発起し、夜間高校へ進学して貴重な経験をされた研究生 小西温代（こにし はるよ）さんをご紹介します。

園田シニアの人間探究5

お歳をお聞きしてびっくり、昭和一桁生まれとは思えない若々しさ！

尋常高等小学校6年の時に終戦。青春時代は戦後の混乱の中を力強く生きてこられました。

子育ても一段落した頃、和裁教室に10年間通って、その技術を極められました。インタビューの際に着ておられた素敵な洋服も、ご自身で作られたものとのこと。

◇55歳から始めた山登り

平成元年 55歳から始めた山登りは、25年となり、今も現役です。

北アルプスの3,000m級の山々を縦走し、いろいろな人との出逢いを楽しみながら、雄大な自然の中で、体力、精神力などを作り上げてこられました。（山登りの紹介記事：けやき便り第9号 平成25年11月20日参照）



左が小西さん

◇湧き出るエネルギーの源

険しい山道を、重いリックサックを背負い、苦勞して登った体験が、間違いなく次へのチャレンジの原動力となりました。また60歳から地域の老人会の会長に推薦され、長く携わった経験は、それからの社会への参加活動へと結びついていくことになりました。

◇青春？をすごした高校生活

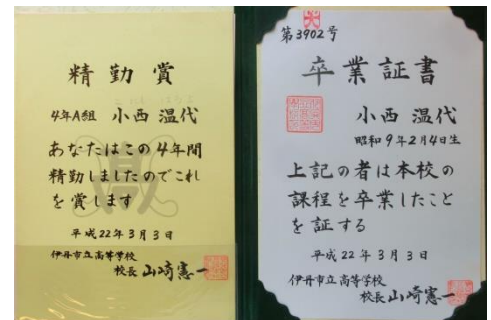
70歳のとき、学びたいとの強い衝動に襲われ、伊丹市立高等学校に入学しました。

授業は夜6時～10時まで。孫の様な年令の学友と席を並べての勉強は、何もかも新鮮で充実した日々でした。

10時以降のクラブは、書道クラブに入り、文化祭での発表にむけて、遅く迄頑張りました。

遠足、体育祭、文化祭などの行事には積極的に参加し、大いに楽しみました。特に4年生の修学旅行は3泊4日の北海道旅行で、たいそう思い出深いものでした。その当時のアルバムを拝見しましたが、若い学友の中に入り込み満面の笑み。まさに青春時代。4年の時の担任が23歳で孫の年代。登校するのが楽しかった気持ちが分かる様な気がします。

学友は、社会人が多く、茶髪、パンチパーマなども珍しくありませんでしたが、見かけと違って皆素直な人だったそうです。多くの友達も出来、卒業後に町で会えばハイタッチ。最終的に入学者の1/3強



の人が卒業となりました。現実には、4年間続けるのが大変厳しい世界ですが、見事に卒業証書を手にされ、さらに精勤賞まで授与されたのには、頭が下がります。

◇終わりなき学び心

高校卒業後には、更に勉強を続けたいと思い、園田学園女子大学シニア専修コース文学歴史学科に入学して早や6年目となります。

これからも研究生として、学ぶことの喜び、楽しい仲間作り等を通し、充実した学園生活を送っていききたいとのこと。

その為にも、健康第一。一日5,000歩以上を当面の目標に立て、しっかり実行されています。

貴重な経験をされ話題豊富な方のインタビューは、時の経つのを忘れさせてくれました。

（インタビュー「けやき便り」編集クラブ 伊藤、石田）

神戸と姫路のベトナム寺院を訪問する

国際文化学科3年 樽井 敏彦

国際文化コースの「国際総合研究」の講義で学んだフィールドワークを実践するため、我々のグループでは、7月3日（金）に神戸の和楽寺、9月13日（日）に姫路の大南寺を訪問しました。

1. 神戸の和楽寺

JRの新長田駅から徒歩15分ほどのところに関西で最初に建立されたベトナム寺院の和楽寺があります。このお寺は、ベトナムのフエ出身で、6年ほど前に仏教の研究のために来日された住職が、この地域に定住したベトナム難民の人々と関わりを持ち、2012年に信徒の皆さんと協力して建てられました。



写真1. 和楽寺

建物は、2棟の古い家を改造して、1階は食堂、2階は本堂になっており、仏像や調度品は、すべてフエから運んだということでした。住職は現在も龍谷大学大学院にて仏教の研究をされており、日常の建物の管理や食事の世話などは、信徒の皆さんが分担して行っています。

ベトナムの仏教は大乗仏教ですが、日本のように宗派の区別がないことが特徴です。また、僧侶になれば結婚できないし、お酒も禁止、食べ物には精進料理しか食べられないなど厳しい戒律があります。信徒の中心となっているのは、1972年のベトナム戦争の終結後に、国を脱出したいいわゆる“ボートピープル”と呼ばれる人たちです。

同じ長田地区には、カトリック「たかとり教会」があり、1980年代からカトリック信徒の難

民を支援していることは良く知られています。

ベトナム難民の6割を占めると言われている仏教徒の人々のために、日本で最初にベトナム寺院が建てられたのは2005年のことです。埼玉県南和寺という寺院ですが、現在では全国に7ヶ所の寺院や道場があります。

和楽寺では、毎日19時30分から読経と説法が行われ、地元の信徒十数名が集まってきます。また、旧正月や花祭り（仏陀誕生日）、お盆などの特別な行事がある日には、関西周辺から200人以上の信徒が集まるそうです。その中には難民の方だけではなく、ここ数年で急増しているベトナムから来日する留学生や技能実習生なども参加しています。



写真2. 和楽寺の本堂

来日後に苦労している留学生や技能実習生などに対しても積極的な支援を行っていくとのことでした。

難民の受け入れが終了してから約20年が経過し、今後は難民二世や三世の世代に移行していきます。彼らは日本の義務教育を受けているので日本語は話せますが、ベトナム語は話せない人もいます。自分たちの文化や伝統と民族の特色、風俗習慣などを理解し、維持、発展させて欲しいという思いから、当寺院でも日本で生まれ育った子どもたちへのベトナム語教育に力を入れているとのことでした。

2. 姫路の大南寺

ベトナム寺院の大南寺は、和楽寺が手狭になってきたため、2013年、住職と難民の信徒の皆さんが一緒になって姫路市の四郷町に建立されました。姫路市は、かつて難民受け入れのための「姫路定住促進センター」が開設された場所であったことから現在でも多くの難民の方が暮らしています。

以前、和楽寺を訪問した際に難民二世や三世、留学生や技能実習生の方たちへのインタビューをお願いしたところ、大南寺の住職も兼任されているP師からの勧めもあって当寺を訪問することにしました。

大南寺の門をくぐると広い敷地内に駐車場があり、その横を進んでいくと大きなテントが張られ、中に机と椅子が並べられた食堂を兼ねた休憩所となっていて、その奥に事務所、舞台、本堂などが並んでいます。我々が訪れた時にはすでに50人程度の人々が集まっていました。



写真3. 本堂での読経

11時から本堂で黄色の袈裟をまとった2人の僧侶を導師として読経が始まり、その後で薄い水色の衣を着た信徒たちが並んで両手を合わせていました。

お昼前になると信徒の皆さんが作ってくれた野菜中心のフォーやお米で作った菓子、チャーと呼ばれる小豆の入った冷たい飲みものなどが我々の前に運ばれてきました。午前の読経や行事が終わると、本日参加した信徒の皆さんにも精進料理の食事が振舞われます。

食事の後、当日集まっていた難民の信徒や難

民二世、日本語学校に通っている留学生や日本企業で働いているという若い人たちを中心にインタビューを試み、いろいろお話を聞くことができました。



写真4. 本堂の前で記念撮影

広い敷地の一角ではベトナムの伝統芸能ムーラン（獅子舞）の新しい獅子が届いたということで、その御披露目と獅子舞の練習が行われていました。当地では、祖国の伝統芸能を紹介していこうと難民二世や三世の児童がムーランを教わり、学校や地域の交流会、お祭りなどで演じています。最近では、姫路市内の国際交流フェスティバルや、アジアの子供たちのイベントなどに招待され、大勢の人々の前でも披露するようになったそうです。



写真5. ムーランの練習風景

今回のフィールドワークを通じて、ベトナム寺院が、在日ベトナムの人々にとって心のよりどころだけではなく、いろいろな情報交換や活動ができる地域コミュニティの場として重要な役割を果たしているのだということが良く認識できたと思います。

市バスの中で

国際文化学科3年 楊 錦華

神戸の市バスにはずいぶん前から弱者のための優先席がある。優しい街づくりの一環で、日本で最初の設置といわれている。杖を持った歩行困難な人、妊婦や赤子を抱いた人、身体障害者、それに外見からは見分けのつかない内部傷害者、体調不良者のための優先席である。今では全国すべての公共交通に浸透していると思われる。

先日の学校帰り、やってきたノンステップバスは相当混んでいた。ドアの端に足を差込み、やっとのことで乗り込めた。奥へ入れないので体を進行方向に向けてポールを握り、その場所を確保するほかなかった。仕切りを隔ててちょうど目の前に優先席があり、その真ん中に30代と思しきヒゲ面の強靱そうな男が座っていた。

優先席の近くまで押されてきた老婦人が弱々しそうに立っていたが、周りはみんな自分の姿勢を保つのに精一杯である。私は思わず視線を彼に向けたと言うよりは、なんとなく視線が彼に集中したことにと狼狽した。きっと非難をこめた冷たい視線であったことだろう。内心、席を譲ってやれば良いのにといい、腹を立てたものだ。

二駅過ぎてヒゲ面は席を立ち、人をかき分けて下車して行った。窓越しに彼が不自由な足を引きずりながら歩いていく姿が眼に入り、思い違いして悪かったと後悔し、心のなかで謝った。

外見からは見えないものがたくさんあるのだ。もっと優しくならないといけないと自分に言い聞かせ、自分の短絡的な愚かさが情けなく、ひとり反省に思い入った。

と、次の瞬間すごい力に背中を押され、かろうじて振り向くと、それは高校生の背負ったザックであった。彼が動くたびにザックが人を押しつけるが、本人は全くそれに気付いていない。

押された人たちには迷惑だが、彼には悪意など毛頭ないはずだ。

人群れの中を行き交うとき、肩が触れ合うことは殆どない。他人との距離を肩幅と両目で自然と測っているのである。なぜなら眼が前についているからできるのだ。ぶつかりそうな距離を感じたら、肩をどれくらい回せば回避できるか、体が反射的に判断できる。狭い通路を自転車ですれ違うときも同じ理屈で、ハンドルの幅が目安になっている。猫が鼠を追っかけ、鼠の穴が抜けられるか一瞬の内に判断するのは、顔の前にあるひげの幅が目安になっているという。

私たちは体の前面にあるものは意識せずともその存在が大きさと共に認識される。しかし体の横側と背後にはみ出たものは、どれだけ飛び出ているのか、特に気にしないと分からないものである。

肩から提げた大きなバッグやタスキ掛けのカバンは腰から大きく突き出す。そして極め付きは背中中のザック類、後ろまでは眼が届かないのだ。これらは自分の視野からはずれ、したがって体の距離センサーが働かない。いかほど周りに迷惑をかけているか、自分では知らないので始末が悪い。他人から見れば、傍若無人の振る舞いに見える。

混雑している車内などよけられない場所では、ザックは前に抱きかかえるか「腹負い」にするとよい。大きなバッグは肩掛けをやめて手に持って下げると場所をとらない。タスキ掛けは荷物を脇から回して前に持ってくるようにすれば、ゆとりがでる。また、入口付近にとどまらず、前・後方に移動することが次に乗ってくる方への思いやりになる。みんなが少しだけ気を配れば混んだ車内も快適になろう。

数日後、背中からザックを下ろし抱きかかえて乗車した若い女性がいた。それを見ただけで感激した。教養深い思いやりのある方と見受けた。他人の善意を信じ、自分も注意しなければと思った。

文字文化の斷層を越えて—舊漢字を覚える—

文學歴史學科3年 相田 晴夫

學生の頃、コーラス部で歌つてゐた。二年上に十絲と言ふ名の女性がゐた。小學校や中學校の同級生には「絲」の字のつく子はゐなかつた。絲は糸の舊漢字だつた。昭和23年以降人名に舊漢字が使へなくなつたからだ。人名にも文章にも新・舊漢字の斷層があるのだ。十年餘り前、妻と臺灣を旅行した。臺北空港に降りて、あつと驚いた。臺灣は舊漢字を使つてゐた。戦後、中國は簡體字に、韓國は漢字ハングル交じりからハングル専用に変更した。一方、同じ漢字文化圏にあつても臺灣では、舊漢字をそのまま使つてゐたことから、私は舊漢字に関心を抱いた。

舊漢字は、昭和21年11月に出された「當用漢字表」1,850字について、昭和24年4月に告示された「當用漢字字體表」により、略字の採用と點畫の整理が行はれ、ここに新漢字が生まれた。當用漢字表はその後、昭和56年10月に「常用漢字表」に引繼がれた。常用漢字1,945字の中で、新・舊漢字で字體が大幅に變はつたものは350字ほど、點畫の細かな違いだけのものまで含めても、字體が變はつたものは545字程度であつた。常用漢字表は更に平成22年11月に、「改定常用漢字表」(2,136字)に置換へられた。

50歳代半ば、舊漢字を覚えて書けるやうにしようと思つたが、會社勤めの間は餘裕がなく實行に移せなかつた。やむなく定年退職の時を待つた。今年の7月、大學への電車通學の時間を學習に當てて覚え始めた。舊漢字の學習は0からの出發ではなく、90ぐらゐからの出發だから、100に到達するのはさほどむづかしくはないと考へた。また、漢字には外國語學習とは異なり、語尾變化がないことは氣が樂だつた。7月のをはり、新・舊漢字の違いがおほよそ飲み込めた

頃になると、そもそも舊漢字を新漢字に改める必要などなかつたのではないか、と思はれてきた。

舊漢字は整然として、美しいし、合理的にできてゐる。當用漢字の制定まで、日本人誰もが舊漢字を使つて暮らして來た。今回、少しばかりの時間をかけて覚えてみると、舊漢字は容易に書いて忘れにくいことがわかつた。日本文學も歴史も舊漢字のまま讀めて楽しめることを知つた。

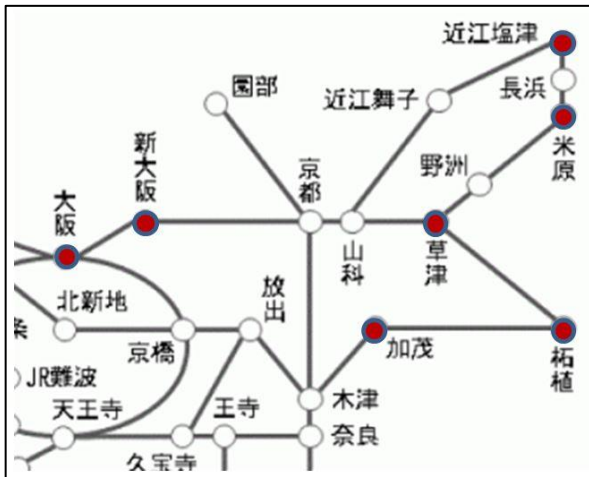
しかしながら、當用漢字による漢字の使用制限を續けて約70年が過ぎた結果、舊漢字表記の本に出會へる機會は、すっかり減つてしまつた。岩波書店の新日本古典文學大系や小学館の新編日本古典文學全集ですら、新漢字表記になつてゐる。たまたま買ひ揃へてゐた岩波の新書版の漱石全集全35巻(昭和31年第一刷發行、昭和53年第六刷發行)は、幸ひにも、舊漢字表記だつた。舊漢字表記の本が讀めて楽しめると喜んだのも束の間、私の本棚は新漢字表記の本が席捲してゐた。私は、舊漢字表記で出版された本の範囲の中で、祖父母が讀み、父母が書いた舊漢字の傳統を受け繼がうと考へてゐる。



琵琶湖車窓の旅

研究生 西島 登志子

J R大阪駅から新大阪まで大回りで 120 円という乗り方があるのをご存知だろう か？ それは一筆書きで大回りする。琵琶湖を回りたくてネットで大阪→加茂→柘植→草津→米原→近江塩津→新大阪と一筆書きを確認。大阪駅で弁当を買い込み 10 時 28 分発大和路快速に乗った。



加茂で降りて次の柘植行きの電車を探すと、一両だけのワンマン電車が目につき駅員に確かめると「柘植に行きます」と言う。乗り込む。行先は亀山とある。あのシャープの工場のあるところだ。電車は山の中に入り、電車一台が通れそうな幅をぬって行く。もちろん単線。降りる時はワンマンなので料金をその場で支払うようだ。柘植駅で料金支払いの時、おそろおそろ「一筆書きで回っています」と言う。「大回りですね。どうぞ」とすんなり通してくれた。三重県に入った。

草津行の発車まで 30 分ほどある。お昼をここでいただく事にした。ヒジキや玄米ご飯入りの健康志向の安くて美味しいお弁当。お茶もたっぷり飲んでおく。お腹が膨れると心も落ち着くようだ。草津までもガラガラの電車。車窓はのどかで、田舎造りの大きな家や畑がすぐ近くに見える。その畑の農具小屋の戸が開いていて農具がちらりと見えたが、気持ちよさそうに並んで吊るされている。使っている人の生き方が出

ていた。それが微笑ましく笑みも浮かんで来た時、少し雨が来た。傘だわと思ったが車中である。濡れないよ。勝手なもので濡れなければ雨も風情がある。しばらく雨を眺めていたらずいぶん都会の雰囲気のある街に向かっている。着いた駅は草津であった。雨は止んでいた。ビルが林立している。

又ここで乗り換え米原へと。電車はやはりガラガラ。着いた米原は新幹線も通っている駅で今までで一番大きな乗換駅。そこから長浜を通り近江塩津まで進む。近江塩津で降りなければすぐに敦賀だ。それもいいなあ。でもそういう訳にもいかず近江塩津で下車。乗り換えて新大阪まで最後の列車の車窓となった。

しかしこの列車が一番混んでいて、4 人座りの窓側に合席させていただく。余呉湖が見えた。近江今津駅の通りに「ヴォーリス通り」という看板が見えた。ヴォーリスの建物があるのだ。首を伸ばしたが見えなかった。すぐに黄金の稲が次から次と続き近江高島駅を通過した。見とれていたが足が窮屈なこと。これは辛かった。おまけに又雨になり、雨の量が尋常でなくなり向こうの窓に稲光も見えた。しばらくして「山科で信号機に落雷があり回復するまで停車します」のアナウンス。40 分延着して午後 6 時に新大阪駅に着いた。駅員に「大回りしてきました」と時刻などを書いた計画書を見せ 120 円の切符で改札を出た。その改札から始発駅の大阪まで一駅乗った。

湖西線では夕日と琵琶湖を期待していたが雨で無理。しかし雨の後の少し曇りの空の中に虹が出ていた。虹は雲と雲の間に少しか姿を現していた。ただ通り過ぎただけの車窓の虹だったが、今日一日の大事な記念として心に残しておこう。

関西本線のあのワンマン一両電車は捨てがたいが、かなりの大回り。琵琶湖一周だけなら京都大津間の 190 円大回りが気軽だ。



次は雪の琵琶湖へ！

「大都市近郊区間内のみを利用する場合の特例」により実施しました。

Not my business

情報学科3年 徳田 將之

「Not my business」と、ジュネーブ国際空港のスイス航空チェックイン・カウンターで言われた、このひとことが強く印象に残っていた。

30年程前の10月、西ドイツ（当時）に4週間程出張していたときの話だが、毎週末にドイツを起点にヨーロッパ各都市へ足を延ばす小旅行を計画し、その週末も金曜の仕事を済ませて、チューリヒに飛びアルプスの自然を満喫したあと、日曜の夕方ジュネーブから空路ケルンへ帰る途中での出来事だった。

旅程は順調だったが夕方空港に着くと何やら周りの雰囲気ざわざわと慌ただしい。フライトボードを見ると全便 cancelled（欠航）と表示され、エジプト航空が着陸事故を起こし滑走路を閉鎖している、とアナウンスが流れていた。

これは困ったことになったな、と思いながらスイス航空のチェックイン・カウンターへ急ぎ、そこで予約便変更についてスイス人？の中年男性職員とやりとりしたが、その概略は次のようなものだったと記憶している。

筆者（以下、H）：（予約便の航空券を示して）

ケルン迄ですが、どうすればいいですか。

職員（以下、S）：ケルンまでなら鉄道の振替輸送をしているので、あちらのカウンターで手続きして下さい。

H：ケルンまで何時間くらいかかりますか？

S：8～9時間くらいかかると思います。乗換列車の接続時間にもよりますが・・・。

H：それは困るなあ。（今からなら到着は真夜中の2～3時ではないか。そんな時刻にケルン中央駅でタクシーがあるのかも分からないし、それに今日は朝から半日列車に揺られてやっとたどり着いたのに、これから更に列車で8～9時間とは勘弁してくれ、と思い）明日早朝の便が予約出来れば合わせてホテル手配も頼みたいんですが、この場合ホテル代

はスイス航空アカウントでいいんですよね？

S：いいえ、ホテルの予約はしますが、支払は個人負担です。

H：えっ！JALではこのようなケースは航空会社が負担してくれるはずだけど・・・。

S：それは出来ません。その費用負担のことでエジプト航空と交渉してください。

H：それはおかしい。スイス航空がエジプト航空とあとで話をすれば良いではないか。

S：（話の分からん男だな、と不機嫌な顔になり）It's not my business！

そんなことをいうのは、あなただけです。ほら、あちらで皆振替輸送の手続きに並んでいるじゃないですか。

と、まあこんなやり取りだったと思うが、押すな押すなの長蛇のなか、後ろからの冷たい視線を背中に感じながら、これ以上粘れるほど神経は図太くできてないので、予約便変更とホテル予約をしてもらいカウンターを離れた。

ところで、この「Not my business」を直訳すれば「私の仕事ではない」だが、もっと平たくいえば「おれの知ったことではない」ということになる。

日本では航空会社やホテル等のスタッフがこのような意味を持つ言葉で客に対応することは考えられないが、欧米の個人主義社会では個人（法人）の責任問題を明確にするためだろうが、この「Not my business」が肩をすくめるポーズと共に出てきても別に驚くことではない、とその後のドイツ人との付き合いで思ったものだ。

そう、自分に降りかかる火の粉はこの一言で払いのけねばならない、と考える社会である。

尤も、JALでは・・・と、クレームをつけてはみたが、後から冷静に考えてみると手持ちの日本とヨーロッパ間の航空券（オープンチケット）はルフトハンザだったから、スイス航空がジュネーブ・ケルン間の短距離客に宿泊費までサービスするはずもなかろうが、仮に日本で同じ状況だったとしても、JALやANAなら

間違っても自社便の利用客にホテル代はエジプト航空と交渉してくれとは言わないだろう。

日本ではお客様は神サマなのである。経験から言えば、“オ・モ・テ・ナ・シ”の国・日本のホテルでなら朝の慌ただしいチェックアウトのときに、フロント担当者が誤ってチャージした身に覚えのないルームサービス等の計上された請求書に後から気が付いたとしても、クレームの電話をすればシフトで変わった別の担当者が受けても「大変ご迷惑をおかけしまして誠に申し訳ありません」と先ずお詫びの言葉があり、その後にはかるべき対応がとられる。

しかし欧米では同じ状況でもシフトで変わった別の担当者の返事は「Not my business」で明日の朝もう一度かけなおしてくれ、とこうなる。欧米人がチェックアウト時にフロントで請求書を細かくチェックし、不明瞭な項目を問い質してるのをよく見かけるが、このような経験がそうさせているのだろう、と私は睨んでいる。

それからしばらく経ったある日、中東に数年駐在していた総合商社の人と呑みながら、件（くだん）の話をして、エジプト航空と交渉したらどうだったろうかねえ？ と訊ねたら、

「それはインシャ・アラー（肩をすくめて）で終わりですよ」というので、「何ですか？ それ」と聞いたら、「全てはアラーの神の思し召しのままに・・・ですわ」ということだった。

彼が冗談で言ったのかどうか分からなかったが、神サマにはさからえない、ということだそう。なんやら、禅問答のようだが、要は交渉しても無駄だということが分かった。

こんなビジネス社会の会社人間だった日常生活から離れて久しいが、自由人（ヒマ人とも言うが）になった今、家人から「お風呂の掃除お願いね」と頼まれれば、「Not my business」といえるわけもなく、「はいはい」と喜んで？ 引き受けている。

文学歴史学科9期生 同期会

研究生 木下 俊造

我ら9期生も卒業後3年目を迎え、研究生で残る人、他のシニアに通う人、趣味に忙しい人などさまざまですが、今年3月11日に「大阪歴史博物館から大阪キャッスルホテルランチ会」、6月27日は芦屋で「谷崎潤一郎記念館～ランチ会」企画を実施し、両日とも17名ずつの参加があり、それぞれ見学にランチに、もちろんおしゃべりにも楽しいひと時を過ごされていたようでした。

3月には知っているようで知らない大阪の歴史を、歴史博物館で観光ボランティアをされていたMさんの語りで聞かせていただいたこと、6月には開催中の『大谷崎展～文豪と五人の女神～』を記念館の職員の方から説明を受け、一瞬でもわかったような気にさせていただいたことが、芦屋での釜飯の味とともに今でも印象に残っています。

ただ9月9日吉村先生による水上勉セミナーの終了後に予定していたランチ会が、台風18号接近のため中止となったのは残念でしたが、12月11日には今年最後の企画「神戸市立博物館～ランチ会兼忘年会」を実施する予定です。

入学時から多人数で企画も盛んなクラスでしたが、確実に年齢を重ねてきたこともあって、今後は親睦プラス様子確認の意味でも、できる限り企画を継続していきたいと考えています。



芦屋市谷崎潤一郎記念館にて

歴史の道・木の芽峠と夜叉が池へ

研究生 橋本 秀明

しばしば利用する会社のツアーに参加。今年2度目の一泊二日の旅。参加者は総勢24名。大半がツアーで知りあった顔。他に馴染みのリーダーと添乗員。以下に行程を示す(移動はチャーターバス)。

・10月31日

梅田・京都竹田＝敦賀＝新保・・・武田耕雲斎本陣跡・・・木の芽峠・・・言奈地蔵・・・旧板取宿＝敦賀(ビジネスホテル泊)

・11月1日

敦賀＝今庄＝登山口・・・夜しゃ滝・・・トチノキの巨木・・・シャクナゲ坂・・・夜叉が池・・・【復路下山】・・・登山口＝今庄＝敦賀＝京都竹田・梅田解散

福井県の嶺北地方と嶺南地方を分ける木の芽峠。この峠を越える道は、北陸へ入る最も古い道として約1200年前に開かれた。交通路の役目を終えた今、山中の古道としての貴重な道である。紫式部・法然・親鸞・道元・戦国武将など有名無名の多くの人々が歩いた。新保の集落は、耕雲斎等水戸の天狗党が幕府に降伏した地である。集落を抜けると、古道の入口。木の芽峠に近づくと3匹の犬に歓迎される。峠に約400年前の古民家があり、主人1人暮らす(由緒ある人らしい)。北側には古道は残っていない。言奈地蔵には、地蔵に因む仇討伝説が残っている。今庄スキー場を経由して、旧板取宿に至る。古民家(住居として使われている処あり)が数件残り、時空を超えた感覚を味わうことができる。



旧板取宿古民家

夜叉が池は、標高1099m・池の周囲230m・水深7.8m。ブナの原生林に囲まれている。辿り着くには歩いて行くしかない。岐阜県側の道もあると聞く。登山口から約3kmである。急な坂道が数か所あるが、一般的な山道である。バスから降りると、樹齢400年のカツラの巨木が迎えてくれる。夜しゃ滝・トチノキの巨木(樹齢300年・2本)・シャクナゲ群生地・ブナの群生などを眺めながら行くと夜叉が池に着く。好天のためか、池の木道の周りはハイカーで一杯。



夜叉が池

夜叉が池は、昔から雨乞いの池また伝説の池として知られる。一例として、干ばつに苦しめられた村をその村の娘が雨乞いのため、池に身を投げて村を救ったという伝説がある。泉鏡花もこの池をモデルにして、戯曲『夜叉ヶ池』を著している。

筆者が実際の眼でみた池は、伝説も浮かびそうになく、況してや、鏡花が描いた大洪水を来すようなことなどあり得ない雰囲気だった。

鏡花の戯曲は、1979年坂東玉三郎・加藤剛主演で映画化されているが、DVD化されていない。2003年/2004年の演劇がDVD化されている。近松研究所から戯曲を借りて初めて読んでみた。戯曲は読むものでないことを初めて気づいた。

2015年11月2日 記

<補足>標高差 1日目 約272m(標高628m)

2日目 約590m

<参考>吉村昭『天狗争乱』(新潮文庫)

『この道を歩こうベスト40』

(山と溪谷社 P.62 北国街道)

台湾のお嬢さんをお預かりして

情報学科3年 峠田 桂子

今回園田学園女子大学の姉妹校である開南大学から11人の短期留学生在来日、ホストファミリーとしてお引き受けすることになった。

お引き受けの経緯は、過去サラリーマンとして長年勤務して来た間に、台湾の方々に何らかの係わりがあり、お世話になったことへの返礼をしておくべきと思ったこと、尼崎市国際交流協会会員であったことにある。

我が家に預かるとなると、自分自身親としての経験がないので、資格がないのではないか心配した。(以前英国に在住している友人から、ロンドンでお世話になったご家庭のお嬢さんミシェルが留学している関西の大学の寮に時々訪問、様子を見てほしいと依頼され、大学での活動などされるときは、必ず出席したことがある)。

7月9日(木)5時、ホストファミリー顔合わせ。教室551で大学から丁于芳(DING YU-FANG テイ ウホウ)さんを紹介され、武庫之荘の新築マンション4LDKの1室に迎えた。

自宅に向かう途中、明日からの通学道順を教えながら、少しずつ滞在中の必要事項から尋ねてみた。まずは、食事のことで留学志願書に肉、魚が苦手と記載されていたので、自宅に向かう途中にあるスーパーマーケットに寄り、食材を示しながら尋ねてみた。やはり魚は「しらす」もダメだった。ラーメンのお肉もダメ、友達に食べてもらうとのことであった。今夜は肉と魚はさけるとして、献立は考え直そうと・・・。

マンションの玄関で、施錠したドアが開くように呼び出しのパネル操作を覚えてもらった。やっと自宅到着、自由に使ってもらふ個室を和室か洋室を選んでもらう。和室で日本風を選ばれるかと思ったが、ピアノのおいてある洋室を選ばれたので、エアーマットをセット、和の敷布団、涼しいタオルカバー、羽の肌布団とした。

すぐ最も使用する浴室、洗面所(洗顔、メイクに十分広い)トイレの使い方を丁寧に説明した。私自身新しいマンションでの設備に慣れなくて、トイレの水のセッティングの方法や、使い方で、水をあふれさせた経験があり、浴室のシャワーの切替えでは、度々水をかぶったり、今まで使わない機能も多くあるので、スイッチのオン、オフを間違えたり・・・。

最近、上海の大きなホテルに滞在したが、トイレには、大きなバスケットが置いてあり、使用したペーパーを入れるようにして、便器の中に流さない様なので驚いた。

T嬢は、朝早くから自国を出発しお疲れと思ったので、お風呂に入ってもらふため、お湯を張りながら、日本の風呂の入りを説明、夕食の準備をはじめた。まずは肉と魚を避け、取りあえず変な取り合わせだったが、コーンポタージュ、エビピラフ、野菜4種のサラダ、フルーツそして紅茶かコーヒーを選んでもらった。明日から大学へ持っていってもらふお茶は、ほうじ茶を選ばれた。翌日からの献立は(明細は省略する)栄養価を考慮し、好まれる物を自由に選べるようにした。

7月10日(金) 塚口駅南側出口まで、ホストファミリーが引率することになっている。長旅の疲れを考慮して7時に起こす。身支度に時間がかかっていたようなので、少々時間配分を心配した。8時頃きれいにメイクアップして食卓に着かれた。40分頃、冷たいほうじ茶を魔法瓶に、日傘を持たせて、時間を気にしながら、付き添って家を出た。T嬢は、短いスカートなので、大学生と言うよりも高校生の様なかわいらしい印象であった。少し通勤の混雑が緩和していた。乗車位置を教えて乗車、3分で塚口駅到着、大学の関係者が出迎えてくださっていた。既に南出口には、何人かのクラスメートが集ま

っていた。手をあげて挨拶をされているのを見た時、すっかりいつもの大学生らしい光景が私の眼に映った。

暑い一日のはじまり、いよいよ研修授業が始まる。午後は日本舞踊や七夕祭りがあるのに、持ち合わせの浴衣は、あまりにも地味で合わなかったもので、愛らしくて、やさしい柄でなければと思い準備をした。昼からの授業に間に合うように本人に渡して頂くよう職員の方をお願いした。

7月11日(土)初めての休日、神戸市内山手側を案内。10時頃神戸に向かうはずが、起床が遅くランチになり、正午前に神戸線に乗る。神戸市内観光のバス停が元町を少し入ったところにあるため、南京町を通る。一昨夜お茶の種類を説明した時、台湾、中国、英国、日本の茶の話をしたので、目に付いたのでしょう台湾のお茶屋を見つけて、「ここに、きっとよいお茶がある」と言ってくれました。

バスは、午後だったので、観光客で混んでいて、山手に向かって行く辺りの説明が十分できなかったのが残念。新神戸で下車、竹中大工道具ミュージアムに入館して、日本家屋の茶室の構造や、建具、工具、外国の工具など見学する……。北野界限をもっと説明したかったが時間がなく、松方ホールへアンサンブル神戸の演奏会に間に合うようにタクシーで向かった。

日本の高校生のバイオリンとドイツ人のビオラ演奏(教授)とのデュエット、ソリストと合唱があり、演奏終了後に出演していた私の弟を紹介した。

演奏会が終わってから、7月15日にシニアの交流会後、神戸地域の研修があり、その後船でのお茶の会がある様なので、帰りは、後日乗船する場所を通った。湾岸を少々説明したが、アンパンマンミュージアムや、かわいらしいものに興味があるらしい。

夕食後、「研修修了後、東京に行きます」と聞き、親としてお預かりしている大切なお嬢さん

に無事帰国していただくこととして、承諾していたので、「大学からは、お聞きしていませんよ、計画書にも書いてないです」と話し、帰国してから、新たに来られる様に話したのですが……。ご本人は計画して来阪されていても、当方は知らないことで、心配で担当者に聞かなくてはと連絡をとったが叶わず、今回も研修生を受け入れられたシニアの学友と真夜中にPCでの連絡となった。学友もそのようなことを聞かれたとのことで、翌日大学へ確かめることになった。翌日両大学の先生にお会いし、種々事情を確認して安心した。研修後は、ご自分たちの責任で楽しく安全に行動されることを願った。

いつも親として研修のレポートを心配していたが、ご本人は、授業後は学友と大阪や、ホストファミリー宅に招かれて楽しまれていました。夕食後は、よくこれから良い人生を歩んでもらいたくて、色々なことを話した(内容は省略)。その外は課題研究や友人知人への連絡に忙しく、邪魔にならない様に翌日の起床時間を約束し、そっとしておいた。

世界中どこも同じ傾向か、ネットで調べる、常に友人知人にすぐにネットで結ぶ。かわいく変装してみるなど、私だけが知らないだけか。お預かりすることが不安な自分だったが、その時々親の責任の様なものを感じ、機転を利かせた。「余計なことを話してうるさかったかな」と思ったが、自宅を離れる時いただいたメッセージカードに、「色々な体験がある小母さん」だということなどが述べられていたので、話は聴いておられたと安心した。

今回文化の違う国からお嬢さんを迎え、短い滞在だったが、私からは、相互が理解し、両国で仕事出来る様な人になっていただきたいと願ったメッセージとした。

思い出に、塗りのお箸、大切に取っておいた花柄の特別なマグカップを贈った。

梅田食べある記

文学歴史学科3年 青木 利明

私が生まれたのは昭和23年である。私の子供の頃は、まだ戦争の影響が残っていた。特に「食」に関しては非常に質素であり、茹でたトウモロコシに醤油をかけたものをおかずとしてご飯を食べると言うのが普通であった。

私の親は教育には惜しみなくお金を掛けてくれたが、「食」には贅沢は決して許さなかった。現在では普通に食べられる寿司や蕎麦と言ったものは、賓客が訪れた時に出前で取るもので、私は脇でそれを見ながら、お客がそれを残すことを願っていたものだった。

私が寿司やステーキなどを食べ始めたのは、23歳で就職し、自分で金を稼げるようになってからである。この為私は、小さな頃から旨いものを食べることに強い憧れをもっており、今でも大学の講義の後、梅田に出て旨いものを求めて食べ歩くことが大好きである。

前置きが長くなったが、今回は梅田で旨いランチの食べられる店をいくつか紹介したい。

2年程前にグランフロント大阪が開業し、また今年の4月にLUCUA1100（イーレ）も開業してから、梅田地区には旨いランチを提供する店が沢山増えました。その中から、美味しいステーキ、寿司の食べられる店を紹介します。

一番目はグランフロント大阪7階にあるTHE CITY BAKERY BRASSERIE RUBIN。この店のUSアングス牛ステーキ（250g 2,580円+税）がお勧め。



このステーキは塩、胡椒のみの味付けで、豪快なアメリカ風のステーキです。一緒に出てくるサラダ、フライドポテトも絶品。特に男性や若者にお勧めです。グランフロント大阪には他にも「スペイン料理のBODEGA」「ひつまぶしの備長」「牛たんの喜助」「焼肉の白雲台」など1,200円～2,000円で食べられる店があります。

二番目はマルビル（JR大阪より徒歩5分）7階にある鉄板焼レストランRIO。この店はヒレステーキランチ（120g 1,900円、180g 2,800円サラダ、ご飯、味噌汁付）を目の前で焼き上げてくれる店で、やわらかなヒレ肉とフレンチ風のステーキソースが絶品。店の雰囲気も良く、特に女性にお勧めの店です。



三番目は富国生命ビル（阪急百貨店東側）地下2階にある寿司店「海馬」。美味しい寿司を安い値段で食べられることで有名。ランチは花（1,500円）、雪（2,000円中トロ、ウニ含む）、月（3,000円）のコースがあり、雪（2,000円）がお勧め。握り寿司8貫、鉄火巻き6個に茶碗蒸し、味噌汁付き。12時～13時は近くの会社員、OLで混むので、13時以降に行くことをお勧めします。



先のお見えてきた私は、あと何回ランチを食べられるだろうか？ そんなことを考えると、一食のランチを大切にしたいと思うこの頃です。

マッターホルンへの挑戦

研究生 橋田 利生

皆様、こんにちは！

いつも、「けやき便り」を楽しみにしております。皆様が、日頃何をされているのか不思議であり、また、楽しみでもあります。長い夏休みを終えて、やっと後期が開講しました。歳をとっても学ぶことは、精神的にも肉体的にも大きな効果があります。リタイアしてから大学に通って、もう何年目になるのか、分からないくらい長くなりました。大学で新たに友ができることも大変、楽しいことです。

また、大学の休みを活用して、旅に出るのが私のライフワークになりました。71歳になったこの歳で、今夏、アタックできるのかそれが大きなチャレンジでした。危険なチャレンジでした。いつも、海外への旅は自由を謳歌するため、準備とコストが大変かかりますが、すべて個人旅行で行きます。

スイスのツエルマットを起点にして、数日かけてマッターホルンにアタックします。マッターホルンは、標高4,478m、尾根の無い単体の急峻な山です。世界的にも危険な魔の山として有名です。

最初にアタックするのは、標高3,260mにそびえる山小屋です。今夏、7月1日に建て替えし、オープンしました。宿泊ができるので、山小屋を目指しました。2,000mくらいから、道がなくなりました。岩ばかりで、道が分からなくなりました。先に登る人の姿も見えません。

困りました。不整脈もあって、何度も休憩し、やっと山小屋にたどり着きました。山小屋からは、どうしてもガイドが必要なので、あらかじめガイドを雇いました。ガイドから特殊装備品の取り扱いなど、マッターホルンをアタックする実技と講義を終日、受けました。高い買い物になりました。

ガイドに従うことが条件でした。翌早朝から、登頂を目指して登り始めました。ロッククライミングは、大変、難しいです。だからガイドが不可欠だと分かりました。4,000mまでは何とか登りましたが、4,100mで天候が急変し、4,000mにある救難小屋に戻り回復を待ちました。下山時間を考慮して、ガイドは登頂を断念しました。登山家でも無理な天候だと言っていました。再び、山小屋に戻ることができたのも不思議なくらいで、厳しい試練でした。

生涯忘れられない経験をしました。



標高は、いくらくらいでしょうか なんども休んで登ります



あと、もう少しで3,260mの山小屋です

二時間あまりの八十八ヶ所めぐり

情報学科1年 藤原 多計治

四国遍路道の歴史

今年は、弘法大師・空海が高野山を開き1200年と記念する年であり、弘法大師が注目されている。そして弘法大師といえば「四国遍路」であり年間30万人の巡礼者が参拝し遍路ブームの感がある。

四国遍路は、空海が開創しその初期は民間宗教者による人里離れた山や洞窟など四国辺地での修行が始まりである。宗教者の修行から俗人による遍路が見られるようになったのは16世紀である。江戸時代になるとガイドブックである『四国遍路道指南』（1687年刊）が刊行され150年以上利用されたロングセラーになった。

甲山八十八ヶ所めぐり

西宮市・甲山 神呪寺（かんのうじ）境内に甲山八十八ヶ所めぐりの遍路道がある。ミニ遍路道が創設されたのは、江戸時代の寛政10年（1798年）である。これは一般庶民にとって四国までの交通手段がむづかしかった時代に、誰でも巡礼を体験できるように四国八十八ヶ所札所の砂を持ち帰り整備された。大坂、京都方面から多くの巡礼者が訪れ、ミニ遍路道は隆盛をきわめ賑わったと伝えられている。

行程は、約2.5km（四国遍路の約563分の1）であり、急坂や岩場を縫うコースで変化に富み充実した山道でもある。コースには祈りを込めて、のみで刻み彫成したいろんな表情の石仏が並ぶ石仏めぐりの道でもある。

ミニ遍路道に挑戦

酷暑も和らいだ去る9月4日（金）に、地域の団塊世代でもあるシニアの善男善女十数名と共に巡礼に挑戦する。

まずは、阪急甲陽園駅から甲山を目指しひたすら急坂を登る。住宅地であるので住民の人は、毎日通勤、通学、買い物に大変だなと思うが、

高級車が鎮座されているので心配無用を認識。我々は、汗が噴き出て、そして息は「ぜいぜい」となるが、一時間あまりのプレ苦行で甲山森林公園に到着。公園バス停から少し歩くと道路より低い位置に一番札所の霊山寺がある。一番札所なのでやはり気がひきしめる。本尊は釈迦如来であるが、石仏はなぜか十一面観世音菩薩である。その横にはお大師様（弘法大師）の石像がおられる。一番札所では、礼拝作法として般若心経を読経し、さらに本尊の釈迦如来の真言（しんごん）である「のうまく さんまんだ ぼたん ばんく」を唱えた。次に二番札所を目指す我々巡礼者は、「信仰心」の高いチームと、信仰心がいまいちのチームに自然と別れる。

二番札所からは道路北側にあり、十二番札所まで続く。各札所には、御本尊の真言が書かれており真言のみの唱和とした。信仰心の高いチームは、各自数珠を持ち熱心に唱える。二番札所の御本尊は、阿弥陀如来なのでその真言は「おん あみりた ていせい から うん」である。次に道路を横断し十三番札所へ進む。あぜ道を通って十四番札所など山の中を歩き、坂道そして階段など歩きにくい道が続く。流れる汗を拭きながら「苦行」を楽しむ。しかし閉口するのは「蚊」の襲撃である。山道では蚊取り線香は必需品と認識した。六十三番札所辺りからは神呪寺がよく見えて気持ち良い。

結願札所の八十八番札所は、同寺の本堂近くにあり一番札所と同様に般若心経・真言を唱和し結願とした。約二時間あまりの巡礼であったが、心身ともすがすがしさに満ち、境内の展望台で勿論「ビール」で乾杯。これが最高です。昼食後帰路についたが、少し厳しさが体に残った巡礼旅であった。

甲山八十八ヶ所めぐりの地図は<http://www.nishi.or.jp/media/2014/88map-01.pdf> 参照願います。

晶子と武郎有情

研究生 村松 広子

私が与謝野晶子に興味を持ったのは大阪に長年住んでいる者として、大阪に関係する作家の事を少し書いてみようと思い、中でも同じ女性として関心があったからです。

“与謝野晶子と有島武郎が心寄せ合っていたのではないか？”と私が思ったのは4年前にDVDで「華の乱」（深作欣二監督）という映画を見たのがきっかけでしたが、結婚後も晶子と鉄幹がずっと仲が良いという通念が、根底から崩れ私にはとても衝撃的でした。

晶子が鉄幹（寛）の才能に恋い焦がれ、堺から東京に行ったものの熱い愛情を持っていたのは4、5年間ぐらいだったと思われます。それは鉄幹の女性に対するだらしなさと、「明星」



が休刊になった頃（明治41年）から鉄幹は歌を作るやる気も無く、うつ病状態でした。さらに鉄幹は大正4年の春、総選挙に立候補し落選の憂き目をみたのです。その後、鉄幹はこれまでの色恋をすべて懺悔し、晶子に打ち明けました。それを聞き晶子は、十余年も共に暮らしながら、自分という存在が鉄幹の心の中に無かった事を改めて知って苦しみ、鉄幹に対する絶望を深めたのです。「歌を作るには恋をすること」と言い続けた晶子自身が、うたいあげる対象を失っていたのです。

そんな中、晶子と武郎が各々の人生の消長を重ねてようやく知り合うのが大正5年、晶子、武郎共に38歳の頃です。武郎は明治36年に晶子の『みだれ髪』をその時初めて読み、体をさし貫く衝撃を覚え、その才能に憧れていました。又、晶子が武郎を意識して傾倒していくきっかけとなったのは、大正8年武郎から送られてきた『或る女』を読んだ時からです。晶子は武郎の才能に衝撃を受けて、その礼状を出したのをきっかけに二人の手紙の交流が始まったのです。

新しき^{うれい}愁^{ようや}があるは漸くに 今知る恋の
よろこびか是れ

河崎なつ氏は晶子が武郎に最も心動いたのは「大正9、10年の事であろう」、また「鉄幹ひとりを相手にあのおびただしい恋うたが生まれますか」とも語っているのです。そんな晶子の弾むような心の動きを、鉄幹は感じとっていたようです。それは何よりも晶子の歌を読み解くことが出来るのは、誰よりも鉄幹自身ではないかと私は思います。

大正10年、鉄幹は晶子の胸中に武郎に対する有る想いを感じとったのです。それはこの夏、武郎と晶子が各々子供を連れて、伊豆で逢う暗黙の約束を知ったからです。鉄幹はその旅行を変更させ、信濃の山あいの温泉に晶子を連れて旅行をしています。さすがに夫の気持ちを思うと晶子は心もひるみ、所詮、武郎との事は許されぬ恋だと何度も何度も自分に言い聞かせました。

帰京後、すぐに執りかかった「明星」（Ⅱ期）で恋を断つ歌を発表した。その時よんだ歌は苦しさと悲傷に満ちていたのでした。

しみじみと泣けば世界のかぐはしく なりぬこれより超えずわが罰

片恋を今捨つるとていみじかる さかさ 逆ま

ごとをする心地しぬ

それらを武郎は丁寧に読み、自分だけが解る世界でした。晶子は別離を宣言していると……。

大正12年に入ると、武郎からの手紙も絶え逢う事もなく、二人の間は疎遠としかいいようがありませんでした。そんな中、その年の5月に武郎は山陰の講演先から寂しい歌を晶子の元に送ったのです。

浜坂の遠き砂丘の中にして さびしきわれを見いでつるかも

この一か月後、武郎は婦人公論記者波多野秋子の粘りつく糸に身も心も絡めとられて、軽井沢で秋子と情死してしまうのです。

武郎の情死後、晶子はぼんやりと空を眺めて過ごす日が多く、目の涯てには、武郎への思慕を諦めたあの信濃の空が続いていたのではないかと私は思ったりもします。

にびいろ 鈍色の空を眺めてある外に いみじきことを知らぬこのごろ

今回私は、晶子と武郎の心の交流を知り、晶子は才能のある男性（鉄幹、武郎とも）が好きだったのではと思いました。鉄幹とは結婚し五男六女を育てながらの妻、母、女であったけれど、武郎との事は、心の架け橋でつながりばかりでは無かった恋だったと考えられるのです。夫の浮気に悩んだり、生活の苦しさや自分の恋の苦しさがあったり……才女と言われる与謝野晶子も、その面では私達と同じ人間だと思ったら、ぐーんと身近に感じ、今まで以上に好きになったのです。

総合生涯学習センターからのお知らせ

□ 学内異動について

榊井かず美（課長）が図書館に……。

平成23年度に総合生涯学習センター配属となってみなさまと関わらせていただきましたが、このたび11月1日付けで図書館へ異動いたしました。

ご教示いただいたことや、お叱りを受けたこと、「あんたとはけんかしたからね!」と言われたこと。いろいろ思い出されます。全てに感謝します。

よりよいシニア専修コースになるよう、今後とも総合生涯学習センターへのご協力をお願い申し上げます。また、図書館へお越しの際は2階事務室をのぞきにきて下さいね。

新任紹介、増田奈美です。

11月より総合生涯学習センターで勤務することになりました。新しい業務を学ぶ日々ですが、一つ一つ丁寧な仕事を心掛けます。一日でも早く皆様のお役にたてるよう努力してまいりますので、よろしくお願いいたします。

以上、ベテランの榊井課長の図書館への異動、そして、新しく増田さんが加わったことを今号でお知らせすることになりました。他のメンバー、木村所長、牧野、占野は変わりません。しかし、大野がこれまでの榊井課長のパートを引き継ぐことになりました。非常に力不足であります。皆様からのご教示、ご協力なしでは進みません。頑張ってみますので、どうぞよろしくお願いいたします。（大野）

□ 新しい取り組みのご紹介

1 新しいホームページ

新しい総合生涯学習センターHPをご覧ください。受講生の皆様方により見やすく、

ご活用いただけるように色彩やデザインに工夫をしています。トップメインページの新着情報に「休講・補講」情報等の通知を掲示します。

2 You Tube「動画集」を公開中

HP上動画集のページも一新しました。

是非ご覧ください。

3 Facebookに「いいね」をお願いします

昨今のSNSの急速な普及。我々センターも専用FBページを開設しました。皆さん、スマートフォンを利用されていますか。FBにも「休講・補講通知」他、新しい情報を随時掲載していきます。是非ご覧ください。そして、「いいね」をお願いします！

□ 「平成28年度入学生募集」

12月初旬より、次年度「シニア専修コース」の募集を開始します。希望者には授業見学の機会をご提供します。皆様方の授業に「見学者」が参加することもありますので、その際はよろしくご協力をお願い申し上げます。

□ クラス委員会について

各クラスの委員が決まりましたので、今年度第2回合同クラス委員会を開催します。万障お繰り合わせの上ご参集下さい。

日時：12月16日（水）14:40～16:00

場所：231教室（2号館3階）

□ 特別講座について（予告）

来年2月に開催予定です。詳細は後日、センター前掲示板、HPでご案内します。従来のような各クラスにおけるチラシ配布を行いませんのでご理解をお願いいたします。

（内容予定） 認知症予防・お金の話

□ 次年度継続手続きについて

例年通り、1月初旬頃にご案内の予定です。1～3年生はクラス委員さんを通じて、また、研究生の皆さんは個人ファイルに関係書類をお届けします。

編集後記

けやき並木が綺麗に黄葉した季節に、素晴らしい記事を満載した「けやき便り」が発行されました。掲載記事からは、シニア専修コースの受講生がアクティブにキャンパスライフを謳歌されている姿が、生き生きと伝わってきます。

「けやき便り」編集クラブに入部してから約1年。「勸学院の雀は蒙求を囀る」の諺のように、編集の経験のない素人でも、回数を重ねるうちに徐々に編集作業の要領が分かってくるように感じます。先輩の皆様方のお陰です。

当然のことですが、句読点や文章の一字一句を修正する場合でも、基本姿勢として筆者の意図を正しく推し量り、本質的な内容が変わらない様に筆者の立場に立って慎重に校正することが大切であることを、勉強させていただきました。（S，I）

今回は120円で巡る旅をお知らせしたく投稿しました。どうぞ雪景色の琵琶湖を、一日ゆっくり暖房のきいた電車で周ってみられませんか！

食いしん坊の私は梅田のお寿司も気になりましたが、その他多彩な原稿にもわくわくしました。校正作業が大変楽しかったです。有り難うございました。（T，N）

今回の「けやき便り」第13号は、皆様色々な体験をされた記事が多く、興味深く読ませていただきました。特に「マッターホルンへの挑戦」は、危険な山登りに挑戦された様子にドキドキしながら読みました。

いくつになっても何事にも挑戦するという事は素晴らしいと思いました。

今回、私は表紙の風景写真を担当しました。10月の中旬に秋らしい校内写真を撮りに行きましたが、まだまだ紅葉には早すぎて秋の風景を探すのに苦労しました。（Y，H）